

「建国記念の日」 管見

祝日法によれば、我が国は「建国記念日」ではなく「建国記念の日」と「の」が付いている。大雑把に考えれば同じようなものかもしれないが、国語的・修辞学的に言えば、前者は特定の日を指す固有名詞であり、後者は説明のための修飾語付き日という普通名詞である。意味は同じであっても、受け取る側の気持ちには天と地の開きがある。同じようなことは、教育基本法改正時にもあった。「愛国心」という表現に余りにも反対が強く、与党である公明党の中にさえ反対の雰囲気満ちていたので、結局、妥協の産物として「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」という長たらしい表現に修正された。日本語では、そういうことを一括りにして端的に表す場合に「愛国心」と表現してきたのである。もっとも、「愛国心」という言葉はある種の人々にとっては、よほど嫌悪を感じる言葉らしく、インターネットで検索すると否定的な意見のオンパレードである。多くの日本人や普通の外国人には信じられないことかもしれないが、それが我が国の現実の姿である。

それでは「建国記念の日」と何故「の」が付いたのか、その理由について考察して行きたい。

建国記念の日は祝日法で「建国をしのび、国を愛する心を養う」と定められている。それでは、先ず我が国の建国をしのぶことから考察を始めた。そもそも戦前は、この日を紀元節として国民挙って奉祝してきた。紀元節は明治六年、時の政府が日本書紀の記述に基づき定めたものである。

今年は奇しくも酉年であるが、日本建国の年も酉年であった。日本書紀第三卷の神武紀によれば、「辛酉年(かのととりのとし)、春正月(はるむつき)、庚辰(かのえたつ)の朔(ついたち)、大王(おおきみ)橿原宮に即位する。この年を大王の元年とする」と記述されている。ちなみに当時は、まだ天皇という呼称はなく、大王と称していた。明治政府はこの「辛酉年春正月庚辰の朔」という日を太陽暦に換算して「紀元前 660 年 2 月 11 日」と特定したのである。

『日本書紀』が編纂された年は養老 4 年であり、西暦では紀元 720 年になる。文字と暦がある程度定着したこの年を基準にして、日本書紀に記録されている「〇〇天皇の△△年月に××事件があった」という事象と十千十二支が元に戻る還暦、つまり六十年毎のサイクルを利用して丹念に計算

すると、神武天皇の即位年の「辛酉年」は紀元前 660 年になると想定した。そして春正月とは、立春のことであり、即位日の干支が「庚辰」とされているので、立春に最も近い庚辰の日を探すと新暦の 2 月 11 日が特定される訳である。その前後では前年の 12 月 20 日と同年の 4 月 19 日も庚辰の日当たるが、これらでは「春正月」にならない。このようにして、明治政府は建国の日を紀元前 660 年 2 月 11 日と定めた。

ちなみに、戦前の海軍兵器の制式名の数字は皇紀の下二桁に依っていた。たとえば、一般にゼロ戦としてよく知られている大日本帝国海軍の「零式艦上戦闘機」は、皇紀 2600 年に採用されたので、ゼロ戦と呼ばれた。

ところで、神武天皇は即位の大詔の中で、「国中を一つにして都を開き、天の下を掩ひて一つの家とすることは、また良いことではないか。見れば、かの畝傍山の東南の橿原の地は、思うに国の真中である。ここに都を造るべし」と述べられている。また『日本書紀』第九卷、神功皇后紀の中に新羅の国王が「吾聞く、東に神国あり、日本と謂う、また聖の王あり、天皇と謂う」と語ったとの記述がある。この二つの記述も我々に建国の様子を教えてくれている。

ところが戦後、GHQは「紀元節は非科学的である。紀元節は日本民族の特殊性や優越性を教え込み、明治政府の国家目的達成のため制定されたもので、歴史的根拠もないし、神話としても不自然である」として、この日を祝日にするのを許さなかった。これに対し、昭和 21 年 2 月、安倍能成文部大臣はGHQのダイク民間情報教育局長に、「神話と歴史は混同されてはならないが、神話もまた存在理由がある。どの国でも古代は神話に包まれているのが常であり、日本の国もまた、たとえ 2600 年ではないまでも、非常に古い国であることは確かであろう。また、皇室を常にその中心としてきたことも確かである。故に、その意味で紀元節を記念し、更に新しい日本の建設という意味で、この日を祝うべきである」と説明している。もちろん、当時の国民も紀元節を支持しており、たとえば昭和 23 年の総理府の調査では支持率が 81%にのぼった。

従って、昭和 22 年、片山哲内閣により提出された祝日の法案に、紀元節が「建国の日」と名称を変えて盛り込まれたのは当然であった。ところが、これに対してGHQは、「世論調査で紀元節を支持する国民が多いのは、75 年間にわたる誤った教育の結果である」として、昭和 23 年 7 月の祝日に関する法律で、紀元節は外されてしまった。

GHQの「科学的でない」について付言しておく。たとえば、神武天皇は 51 歳で即位され、75 年間在位されている。神武天皇の年齢を現在の暦に直すと、日本書紀では 127 歳、古事記では 137 歳まで生存されたことに

なる。平均寿命が 30～40 歳であったろうと想定される時代に常識的にあり得ない長寿である。また日本書紀と古事記の記述そのものに 10 年の開きがあり、細かく言えばこれも科学的とは言えない。

では、どのように解釈すれば良いのであろうか。

要するに、記紀(古事記と日本書紀)は、世の中が混沌としていた時代の「神話の世界の物語」と理解すべきである。参考までに付言しておく、平安時代、宮廷では貴族により日本書紀の研究が数回行われている。記紀が編纂されて、わずか百年後には既に平安貴族が研究に着手していたことに驚かされるが、その中で紀元 802 年に講師を務めた学者の講義メモが残されている。その冒頭に「日本書紀は、大昔の天地が混沌としていたときから、やがて世の秩序が定まるまでの時代のことを記しており…云々」と記されている。つまり、編纂されて百年も経たない平安時代から既に、記紀が「神話や伝承の世界」であることは共通の認識であった。

それを GHQ が現代の科学に当てはめて「非科学的である」と断じたのは、ある意味、止むを得ないことかもしれない。何しろ、アメリカは建国以来、わずか 250 年の歴史しかなく、米国人にとっては神話とは荒唐無稽な子供の戯言でしかなかった。一方では、日本に文字が伝来し定着したのは五世紀頃、暦に至っては 6 世紀末頃であり、それ以前の歴史が科学的でないことは当然である。

国宝に指定されている「漢委奴國王印」という金印は『後漢書』に出て来るので、1 世紀頃、我が国に到来したことになる。しかし、当時は文字としてではなく表記された飾りではなかったかと推測されている。その後も、貨幣や銅鏡などの文物がもたれされたが、多くの日本人にとっては文字は飾りであって、文字と認識していた者は極めて少数であった。

我が国に文字として公式に漢字が伝来したのは、応神天皇の 15 年、百濟から王仁博士がやって来て、『論語』と『千字文』を献上したのが最初である。この応神天皇 15 年が、西暦の何年に当たるのかは議論のあるところであるが、五世紀の初頭に当たるという説が有力である。そして、これ以降、我が国は名実ともに文字(漢字)の時代に入り、それほど間を置かずして、独創的な平仮名と片仮名が生まれ、我が国独特の固有文化が栄えた。暦の伝来についても諸説あるが、日本書紀によれば、欽明天皇の時代に百濟から暦博士や百濟僧が暦を献上し、6 世紀末の推古天皇や持統天皇の時代には暦を使用したとの記録がある。

文字や暦がなかった時代、それは建国から紀元 5～6 世紀の間であるが、その間にあっては、歴史は語部によって伝承されて来た。そう考えると、約千年もの間、口伝のみの伝承によって伝えられた歴史が科学的であるは

ずがない。暦がなかったので、当然、いつの時代かもいい加減であったろう。つまり、平安時代の学者が既に看破していたように、記紀は「天地が混沌としていた時代から、やがて世の秩序が定まるまで」の記録なのである。裏を返せば、我が国は考古学や科学的根拠だけでは解明できないほど、歴史が古く、またある意味では「格式がある」と言うことである。

記紀が編纂された時代の我が国の様子は、隋の正史である隋書倭国伝が伝えてくれている。隋書倭国伝といえ、推古 15(607)年、聖徳太子が隋の煬帝に送った「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙なきや」という国書の一節が有名である。しかしながら、隋書倭国伝の中には日本に関して「気候温暖にして、草木冬も青く、土地膏腴(こうゆ=肥え美しい)にして、(中略)人、性質直にして雅風あり。(中略)人すこぶる恬静(物静か)にして、争訟(争いごと)まれに、盜賊少なし」との記述がある。今から 15 世紀も前の日本と日本人の姿が、端的にしかも力強く描かれている。「性質直にして雅風あり」とは、素直で美を尊ぶ平安の雅を感じさせ、その後の武士道の時代にも通ずる精神であり、現代まで脈々と受け継がれて来た日本人の特質である。変わらないこれらの恒久性を見る時、日本の歴史が一度も断絶せず永続してきたと実感される。誰が何と言おうと、文字も暦もなかった遙か古い時代に建国し、文字が入って来た時代には、既に国家としての矜持を高く掲げていた先人の高邁な精神と颯爽とした国家意識に驚くばかりである。

およそ全世界の 190 余りの国は、各々の国の歴史を尊び、国家的行事として建国を盛大にお祝いしている。国内に居てはそれほど感じないかもしれないが、実は我が国においても各国に駐在する大使館において、「ナショナル・フラッグ・デー」として駐在先の政府要人、各国大使、駐留邦人等を招いてパーティを開催するのは天皇誕生日と建国記念の日の年二回である。国の成り立ちは様々であり、多くの国が独立記念日や革命記念日を建国記念日としているが、我が国では神武天皇が大和で即位された日を建国の始まりとした。

その日以来、万世一系の皇統が連綿として継承され、今日に至っている。万世一系とは、記紀に書かれた神武天皇にまでさかのぼり、ひいては天孫降臨の瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)、その祖先である天照大御神までさかのぼるということである。更に、現在の平成天皇は第 125 代の天皇であるが、その意味するところにも触れておきたい。世界中に主要な君主国が 11 カ国あるが、日本に次いで古いデンマークが紀元 990 年から 54 代、イギリスが 1066 年から 40 代である。そのうえ、両国とも王朝の交代や断絶があり、しかもイギリスは国民と王朝が異なる民族である。国民が王室に非常

に親近感を持っているタイ王室は、1782年から10代である。要するに、日本の皇室は同じ血統で維持されてきた世界最古の王室であり、しかも皇室と国民が同じ民族で王朝の断絶や交代が一度もなかった。2千年以上続く皇室の存在は、日本が世界に誇る宝であり、地球規模的・世界史的に観ても類い稀な国家なのである。

このように日本は歴史と伝統に輝く国であるが、一方ではノーベル賞受賞や百十三番目の新しい元素の発見に見られるように、世界の最先端の科学技術と産業を有している。最近では、日本の食文化やおもてなしやアニメが世界を席卷している。政治面では三権分立や法治主義を基調とする民主主義国家である。特定の国家や妙な歴史観を持つ人々にとっては、日本は嫌悪の対象かもしれないが、世界中の多くの国家と人々にとって日本は憧れの対象なのである。日本は天皇という世界無比の存在を中心に、歴史伝統と科学技術とが融合・共存している民主国家なのである。

ところで昭和22年、片山哲内閣により、日本国憲法にふさわしい祝日として紀元節が「建国の日」として法案に盛り込まれていたが、先述したようにGHQにより削除された。占領下にあっては、GHQの力は絶対的であり、紀元節の復活は認められなかった。従って昭和26年、サンフランシスコ講和条約により我が国の主権が回復した際、国民の間に「紀元節復活」の声が高まったのは当然であった。昭和29年2月のNHKの世論調査によれば、建国記念日制定の賛成は87.4パーセントに上り、反対はわずかに4.5%に過ぎなかった。しかし、GHQの負の遺産ともいえるべき左翼勢力の反対は根強く、建国記念日が祝日として制定されるまでには国会で9回にわたって法案提出と廃案とが繰り返された。そしてようやく、祝日に制定されたのは昭和41年になってからである。そして政令によって2月11日とされ、施行されたのは昭和42年になってからである。しかも、建国記念日を「紀元節」と同じ、2月11日とすることに対しては、社会党・共産党を筆頭に左翼勢力が、先のGHQの言い分そのままに「非科学的である」として強硬に反対した。面白かったのは、「2月11日がダメならいつにすべきか、対案を出せ」との議論の中で、元旦とか、終戦の日とか、主権回復の日が良いとか、児童に類する意見が提出されたことである。元旦は暦の上の節目であり、その他は「それ以前の歴史は日本ではないのか」となり、建国記念日にはならない。最終的に佐藤栄作内閣は「我が国は建国の始まりも、神話・伝承の世界まで遡れるほど長い歴史のある国である。建国の頃は、当然、文字も暦も無かったので、科学的ではないかも知れない。しかし、建国記念日をいつにすべきか、何らかの具体的な根拠を求めるとすれば、2月11日以外の日はあり得ない」と説明し、

制定に漕ぎ付けた。もちろん、当時の世論調査でも当然のことながら、2月11日が最大の支持を得ていた。しかしながら、その際も、左翼勢力がGHQの言い分と同じく「非科学的だ。空想だ」と強硬に主張したため、妥協の産物として「建国記念日」ではなく、「建国記念の日」と「の」が付いたのである。

建国を記念する祝日の制定は、我が国の歴史を否定するGHQ及び左翼勢力と、それを取り戻そうとする我々国民との長い戦いであった。実はこの左翼勢力との戦いは今日も継続しており、特定秘密保護法や安保法制も同じ構図であった。今後予定される憲法改正も同じと思われる。更に極端に言えば、中国・韓国が大騒ぎする南京大虐殺や従軍慰安婦問題も、そもそもの論に立ち返って本質を仔細に観れば同じ構図から発生している。

チェコの作家ミラン・クンデラは「一国の人々を抹殺するためには歴史を消し去った上で、誰かに新しい歴史を書かせることだ」と語っている。まさしく「建国記念の日」と「の」がこれであり、中韓の歴史戦もこれの延長である。そしてこれを煽り立て、助長しているのが左翼知識人と偏向マスコミである。

一方、今日までの長い歴史の間には、我が国にとって、内外共に多事多難なることもあった。特に、世界に道を開き近代文明を歩み始めた明治時代、デモクラシー旋風の中での経済恐慌に苦しんだ大正時代、大東亜戦争と敗戦等、未曾有の国難に当たった昭和の激動期は、記憶に新しいところであり、そして平成の今日、世界中いたるところで、テロや紛争が続き、我が国周辺でも南シナ海・東シナ海及び朝鮮半島情勢など、不透明さを増している。このような情勢の中であって、我が国は世界中の国々から、色々な貢献を期待されるまでに発展してきた。これもひとえに、祖宗・先達の方々が幾多の苦難に遭遇しながらも、心血をそそいで国体の護持と発展に努めてこられた賜物である。我々は、この精神と祖先への感謝の念を忘れてはならない。

いずれにせよ、今後とも、日本が「本来あるべき姿に戻る」ことに関しては、左翼勢力があらゆる反対を展開すると覚悟しておかねばならない。しかしながら、我が国を取り巻く厳しい国際情勢を考えれば、それほど時間の猶予はない。何より、子や孫の代に「負の遺産」を残す訳にはいかない。「建国記念の日」を目前に、自ら覚悟を改めるとともに、多くの真の日本人にも覚悟を求めたい。各々方、油断めさるな！